



感情管理と性格帰属 : ゴフマンのアクション論の検討を通して (特集2 「状況の社会学」の展開可能性)

木村, 雅史

(Citation)

社会学雑誌, 41:161-176

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503776>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503776>



特集2 「状況の社会学」の展開可能性

感情管理と性格帰属

——ゴフマンのアクション論の検討を通して——

木村 雅史

作新学院大学人間文化学部准教授

一 問題設定

ゴフマンは、感情に関する相互行為論的な視点や概念を提供することで感情社会学に貢献してきた (Jacobsen, 2022: 158)。周知のとおり、ゴフマンの関心は「相互行為秩序はいかにして可能か」(Goffman, 1983)とこう問いに集約することができるが、感情についても相互行為秩序に沿って管理される対象として記述されていく。ゴフマンにとって相互行為秩序の攪乱を示す警報装置として機能しているのが、状況の中にいる人々が集合的に経験する不安、当惑、不快感といったネガティブな感情であり、そうした感情の発動を合図に人々は相互行為秩序の攪乱を協同的に修復したり、あらかじめそうした攪乱を回避するための実践へと駆り立てられていく (安川、一九九七)。

ゴフマンが感情について論じている代表的な議論を以下に挙げてみよう。『日常生活における自己呈示』における、パフォーマンスの筋立てに合わせた適切な感情の呈示と不適切な感情を抑制する「自制(self-control)」の規律 (Goffman, 1959 = 二〇二二)。「ゲームの面白さ」論文 (Goffman, 1961 = 一九八五)における、出会いの変形ルールと自発的関与の一致／乖離とユーフォリア／デイスフォリア。「当惑と社会的組織」論文 (Goffman, 1967 = 二〇〇二)における、相互行為秩序が攪乱された場合に経験される「当惑 (embarrassment)」とその協同的修復や回避。どの議論においても、相互行為秩序による感情の規制や、秩序の攪乱によるネガティブな感情が人々によって協同的に修復・回避されるといった視点が通底しており、応用研究でもこうしたゴフマンの視点を土台にしているものが多い。たと

えば、相互行為秩序の裂け目に対する修復実践としてユーモアの機能を論じたもの (Mack and Fine, 2022)、相互行為儀礼論の観点から展開されたシェフの自尊心—恥システム論 (Schett, 2006, 2013)、男性医師による女性患者の診療場面における当惑の協同的回避実践を記述したヒースの研究 (Heath, 1988) などがある。ゴフマンの感情管理論から感情規則や感情作業といった独自の概念を設定し、感情労働論を展開したホックシールドの議論 (Hochschild, 1979, 1983 = 二〇〇〇) はよく知られている。

こうしたゴフマンの視点に対し、ビリッグは、ゴフマンの感情管理論は相互行為秩序の攪乱によって他人が経験するネガティブな感情を協同的に修復・回避してやる「いい人」を前提とした理論であり、恥じ入っている人間を嘲笑したり、からかったりする攻撃的な相互行為を扱えないと批判している (Billig, 2001)。たしかに、先に挙げたような応用研究でも、相互行為秩序の攪乱によるネガティブな感情が人々によって協同的に修復・回避されるという側面が主題化されている。しかし、ゴフマン理論全体を見渡せば、ゴフマンは、相互行為秩序を維持するための感情管理という一貫した視点から、相互行為秩序の攪乱に対する人々の協同的な相互行為と、人々が攻撃し合う競争的な相互行為を連続的に扱っており、ビリッグの批判は早計であると言わざるを得ない。本稿では、『儀礼としての相互行為』

(Goffman, 1967 = 二〇〇二) に所収されている論文「アクションのあるところ (Where the Action Is)」(以下「アクション論と略記する」) を題材に、先行研究で主題化されてこなかった競争的な関係における感情管理を検討することにした。

ゴフマンは、青少年の非行と犯罪に関する研究助成を受け、一九六一年頃からラスベガスのカジノでブラックジャックのディーラーとして働きながら参与観察を行っているが、その研究成果の一部をまとめたのがアクション論である (Shalin, 2016)。アクション論では、結果の偶然性・不確実性が高い活動に対する個人の自発的参加としてのアクションと、アクションが喚起する興奮や不安に対する感情管理、その成否に対する評価としての個人への「性格 (character)」類型の帰属、性格の獲得をめぐる個人間の競争である「性格の競争 (character contest)」となった「リステイク」の社会学 (Cosgrave, 2008, 2020) が展開されている。ゴフマンは、アクション論の結論で、規範によって個人の自己利益への欲求が抑制され、社会成員が共通の目標を追求することで社会が再生産されるとする「伝統的な社会学の人間観は楽観的」(Goffman, 1967, 258) と揶揄している。アクション論は、伝統的な社会学が「非生産的な活動」として排するギャンブルを原型にアクション概念を抽出し、伝統的な社会学とは異なる行為 (action) 観を

提示した議論として位置づけられている (Shalin 2016: 19; 若狭、二〇二二:六四)。

詳しくは三節で論じるが、先行研究がゴフマン理論の特徴として位置づける相互行為秩序の協同的維持や、秩序の攪乱に対する協同的修復・回避へと志向した感情管理を「協同・リスク回避型」の感情管理とすれば、アクションが人々にもたらす感情管理は「競争・リスクテイク型」の感情管理として位置づけることができる。先行研究では、アクション論について、リスク社会におけるアイデンティティのミクロ社会学理論としての側面 (Giddens, 1991 = 二〇〇五; Lyng, 2016)、ギャンプルというメタファーが相互行為研究にもたらす意義 (Kristiansen, 2022; 若狭、二〇二二)といった論点が主に論じられてきた。ただ、ゴフマンはギデンスが論じなかったリスク社会における社会秩序の再生産に必要な感情作業の必要性を論じた (Lyng, 2016: 76) と位置づけられながらも、その感情作業とはどのようなもので、社会秩序の再生産にどのように関係しているのかなど、アクション論は感情管理の観点からは検討されてこなかった。感情管理の観点からアクション論を検討することで、競争・リスクテイク型の感情管理も、協同・リスク回避型の感情管理とは反対の方向から相互行為秩序の維持に寄与していることが明らかになる。本稿は、感情管理の観点からアクション論を検討することで、協同・リスク回避型と

競争・リスクテイク型の感情管理の類型と、両者の移行関係として相互行為過程を記述する視点を提示した議論としてゴフマンの感情管理論を位置づけることを目的とする。

二 アクション論の検討

二・一 運命性

では、アクション論を検討していくことにしよう。アクション論における中心概念となるのが「運命性 (fatefulness)」という概念である。ゴフマンは、「運命性」を「ある活動が問題をはらんでおり、かつ結果性をもつことがあり得る。こうした活動を私は運命的なものと呼ぶ」(Goffman, 1967: 164 太字原文イタリック)と定義し、「出来事的 (eventful)」[偶然性 (chanciness)]とも言い換えている。この定義にある「問題をはらんだ (problematic)」とは、投げ上げた硬貨の表裏を当てる硬貨投げにおいて硬貨を投げ上げている状況で、まだ表裏のどちらが出るのか結果が決まっていない状態のように、「客観的な意味で、まだ決定されてはいないがまもなく決定される事柄」(Goffman, 1967: 152-153)を意味する。「結果性 (consequentiality)」とは、「清算が行われる機会の境界を越えて溢れ出し、賭けた人の後の生活に客観的に見て影響を及ぼす清算の容量」(Goffman, 1967: 159-160)を、「清算 (payoff)」とは、「勝ち取る賞金

ないし失う賭け金」(Goffman, 1967: 150)を意味している。すなわち、運命的な活動とは、ギャンブルのように、賭けの時点ではその結果が不確定であり、かつ大金を賭けたギャンブルに勝って贅沢な生活を送るのか、負けて生活に困窮してしまうのかといったように、賭けの結果が賭けの場面を越えてその人の生活に影響を及ぼし得る活動を意味する。

ゴフマンは、人間を取り巻く条件には常にある程度の運命性が伴っていると述べ、運命性の根本的な基礎として、人間の身体と、其在をもたらず「社交的状况 (social situation)」を挙げている。物理的存在としての人間の身体は、傷ついたり、痛みを感じたり、病気になるったりといった危険に常にさらされている。そのような意味で、人間の身体そのものが「結果性をともなう装置」(Goffman, 1967: 167)である。社交的状况とは、「二人か、それ以上の人々が互いに直接、身体的に居合わせていることを認識している間持続し、こうした相互監視が可能な領域全体へと広がっていくような相互監視の様々な可能性のある環境」(Goffman, 1967: 167)を意味している。自分と他人が身体的に居合わせている環境としての社交的状况は、偶然の出来事の発生や身体の傷つきやすさ、儀礼的秩序の侵害による不適切行為を他人に目撃されるといった要因によって、他人に対して自分に関する好ましくない情報を流す危機にもなれば、逆に好ましい情報を流す好機にもなる。ゴフマ

ンは、運命性にしろ、運命性をはらんだ社交的状况にしろ、その不確実性に身をさらし、好機をつかもうと企てることを「実地的なギャンブル (practical gamble)」(Goffman, 1967: 171)と形容する。たとえば、実地的なギャンブルといえる職業として、身体的な危険を伴う高層建設業や軍人・警察、成功するか失敗するかが偶然的な要因に左右される不動産投機、俳優等のパフォーマンス業、身体的な危険と偶然性の高さをもつ犯罪やプロスポーツ等がある。

人は、危機と好機をはらむ運命性に対して、どのように対応するのだろうか。ゴフマンは、運命性に対する個人の対応の仕方について、「対処 (coping)」と「防衛 (defense)」を対として挙げている。対処は、運命性やそれがはらむ危険そのものを最小化したり、回避したりする行為を指しており、ゴフマンは、身体の傷つきやすさへの注意、運命性を制御する保険としての礼儀やエチケットといった例を挙げている (Goffman, 1967: 180-183)。危機と好機をはらむ運命的な活動は、個人に不安と興奮の感情をもたらし活動である。防衛は、運命性と結びついた不安、後悔、失意といった感情的反応を管理する実践を指している (Goffman, 1967: 183)。ゴフマンは、ボクサーが試合前に行く様々な縁起かつぎ、たとえば、決まった物を食べたり、勝った試合で着ていたガウンをどの試合でも着用するといった実践を防衛の例として挙げている。

二・二 アクション

ゴフマンは、運命的な活動のなかでも外的な要因によって強制されたものではなく、その活動自体を目的として個人が自発的に行うものが存在する (Goffman, 1967: 184-185)、と述べる。たとえば、ギャンブルは基本的に強制されて行うものでも、金銭を得るためだけに行うものでもなく、賭けることそれ自体を目的として自発的に行われるものである。この運命的な活動の自発的な引き受けとして、ゴフマンが提示しているのが「アクション (action)」の概念である。ゴフマンは、アクションを「結果性をもち問題をはらんでいる活動、その活動自体のためにあるものと感じられるもののために引き受けられる活動」(Goffman, 1967: 185) と定義している。ゴフマンによれば、アクションという言葉は、ギャンブルの世界の俗語として生まれ、チャンスに賭けることがその人の生活の基盤をつくるかもしれない状況を指すものとして、ギャンブル以外の状況にも転用されていった言葉であり、その意味で「ギャンブルがアクションの原型 (prototype)」(Goffman, 1967: 186) だという。ゴフマンは、ギャンブル以外のアクションの例として、試合結果が選手の生計や名声の獲得・喪失に影響するプロのスポーツ競技、「高価なものを消費したり、金のかかる流行の娯楽を楽しんだり、豪華なものに囲まれて時間を過ごしたり、名声のある人と交際すること」で社会的流

動性の味わいを得る (中略) 消費のアクション」(Goffman, 1967: 197) を挙げている。

運命的な活動の自発的な引き受けとしてのアクションが成立するためには、目の前の活動が運命的なものであるということが顕在化され、人々に十分に認識されていなければならない。ゴフマンによれば、「日常生活では、個人は実際に存在していた危険と好機に気づかず、プレイが終わってから初めて自分はギャンブルをやっていたと気づくことがある」(Goffman, 1967: 161)。運命的な活動に実際に関わっていたとしても、本人がその運命性を認識していなければ、自発的な引き受けという契機が成立せず、その活動はアクションとはいえない。この運命性の顕在化と関連するのが、アクションの「強度 (intensity)」という基準である。ゴフマンは、「アクションの程度——その真剣さ、あるいは真正性——は、それらの特性がどれだけ顕著になっているかにかかって」おり、「プレイの四つの局面——態度決め、決定、開示、決着——が、注意と経験が持続的に緊張しているようなごく短い時間のなかで起きる時、アクションは最も強いものとなる」(Goffman, 1967: 185) と述べている。つまり、その活動が運命的であるということが顕在化しており、短時間でその結果が出る場合がアクションの強度がある状況といえる。

では、運命性の顕在化とその自発的な引き受けとしてのア

クションを成立させているのは何なのか。ゴフマンによれば、それは「アクションの機会を効率的に生み出す調整(arrangement)」(Goffman, 1967: 203)である。たとえば、ギャンブルの場合、カジノという場所やその仕組みが調整の役割を果たしている(Goffman, 1967: 201-203)。カジノでは、そこに入って行き、勝負するテーブルに金を置くだけで賭けを始めることができる。また、カジノはプレイ時間が短いため、同時複数プレイが可能であり、複数の賭けの開始と決着を重複させることでプレイの密度、すなわちアクションの強度を高めることができる。

若狭は、運命的な活動の自発的な引き受けとしてのアクション概念の含意について、「これはゴフマンが活動の区分に参与者の意志の有無という曖昧なものを想定したことを意味していない」と述べた上で、まさに参与者が運命的な活動を自発的に引き受けたかのように「調整」されるのがアクションである(若狭、二〇二二・六二)と位置づけている。このとき、付言すべきは、運命的な活動の自発的な引き受けを促す調整は、そうしたアクションに伴う不安や興奮といった感情の自発的な引き受けや自己調節を促す装置としても位置づけることができる点である。たとえば、カジノでは、自分の賭けに伴う運命性をどのように管理するのか、「対処」なのか、「防衛」なのか、あるいは両者なのか、あらゆる予測計算をすることができる。こうし

た予測計算のしやすさは、自分を追い込む限界を自分で決め、それに伴う不安と興奮を引き受けることを促す。ゴフマンは、他の調整の例として、闘牛に関する風習を挙げている。たとえば、闘牛士には、自身の体のすぐ横を闘牛に走らせるパセという伝統的な技が義務づけられており、「闘牛をしている間に自分が招き入れる自分にとつての危険性がどの程度かによって評価される」(Goffman, 1967: 203)。このとき、パセによって闘牛士の体が危険にさらされるほど観客が感じるスリルは高まる。調整としてのパセは、闘牛における運命性とそれに伴う感情を高めるように作用している。

二・三 性格

アクションする際に人はこのような感情の自発的な引き受けを要請され、先に述べた感情管理の実践である「防衛」を行うことになる。ゴフマンによれば、アクションする際のこうした感情管理に対する評価として人が獲得するのが「性格(character)」である。ゴフマンによれば、アクションを通して自制的に振る舞える能力を呈示できると、勇氣、不屈さ、誠実さ、冷静さといった「強い性格(strong character)」を獲得できるが、感情に溺れる姿を露呈してしまうと「弱い性格(weak character)」を帰属されてしまう。すなわち、「運命性の圧力があるところで有能、かつ適切

に行動できる能力が欠如している証拠は**弱い**性格の徴候となる。「中略」いざという時に——精神的な誘惑や課題の遂行に能力を発揮する際——自制を完全なたちで維持できる著しい能力の証拠は**強い**性格の徴候となる」(Goffman, 1967: 217 太字原文イタリック)。この強い性格／弱い性格という評価の基準について、ゴフマンは、「性格に関する性質は、常に道徳的な観点から評価される。なぜなら、いざという時に自分を動かす能力は常に社会的評価 (social evaluation) を受けるからである」(Goffman, 1967: 218) と述べている。

強い性格のなかでも、運命性の管理に関してゴフマンが最も重要だとするのが「冷静な (composure)」であり、それは「感情的な自制 (emotional self-control)」(Goffman, 1967: 222-224) とも言え換えられている。ゴフマンは冷静さが含む側面として、困難や緊急事態に直面しても身体的な礼儀作法を維持する能力である威厳や、恥じ入ったり、自意識過剰になったり、パニックになることなく、多くのオーディエンスの前に立つ危険と好機に耐える能力である舞台度胸を挙げている。このように、性格は社会的状況において共在する他者に向けて呈示され、他者による査定の結果、その評価が確定するものである (Goffman, 1967: 234)。では、なぜ、アクションする際に、冷静さや感情的な自制の呈示が強い性格として高く評価されるのだろうか。

か。ゴフマンは、この点に関し、以下のように述べている。

社会が個人を利用する場合、個人は自らに訪れている重大なチャンスに十分にきちんと見定めなければならないが、その見定めによって混乱したり、意気消沈してはならない。それができた場合にのみ、個人は、社会組織が維持される際に社会の活動場面に要請する安定と連続性をもたらすだろう。社会は、自制心を示す人々には強い性格を、簡単に気が散ったり、感情に溺れる人々には弱い性格を帰属させることで、こうした能力を道徳的報酬によって支えている (Goffman, 1967: 259)。

不安や興奮といった感情が強く喚起されるアクションの場でも個人が冷静さを維持し、自制できてこそ、社会の活動場面に要請される安定と連続性をもたらされる。ゴフマンは、他の強い性格の例として、「道徳的な模範からほんの束の間逸脱することで多くの利益と多少の非難があるような状況で利益の誘惑に屈しない性向」である「誠実さ (integrity)」(Goffman, 1967: 219) を挙げ、「社会の成員がこの性質を是認し、大切にしないのであれば、どんな社会も長続きはしないだろう」(Goffman, 1967: 219) と述べている。この点からも、人々の活動場面が安定的に持続する

ために貢献するのが強い性格の呈示であり、その意味で性格は「社交的評価」の観点から道徳的に評価されることがわかる。

アクションにおける性格の獲得と社会との関連について、ゴフマンは、性格概念には矛盾が存在すると主張する。すなわち、「性格は個人に関する本質的で不変的なもの——その個人に関する特徴——を指す一方で、運命的な時間のなかで生み出されたり、破壊されたりする様々な属性を指す。(中略)ここに矛盾が存在する。性格は不変(unchanging)でありながら、変わり得るもの(changeable)である」(Goffman, 1967: 238)。ゴフマンによれば、この性格概念における可変的な側面と不変的な側面はそれぞれ、社会の組織化に必要な「連帯意識(morale)」と「連続性(continuity)」の要請に応えたものだという。

どの場所でも社会の組織化には、連帯意識と連続性という問題が存在する。個々人は、多少の情熱と関心をもって、皆それぞれのささやかな状況にやって来るはずである。なぜなら、大抵こうした機会を通してこそ社会生活は生じるのであり、そうした機会に新しい努力が注がれないのなら、社会は確実に損害を被るだろうからである。評判を上げる可能性が、そうした努力の動機になる。しかし、社会が持続するためには、

実際の社会的場面から次の場面へと同一のパターンが維持されなければならない。ここで必要になるのが規則と慣習である。個々人は、すでに自身のものとして受け入れられている特性をふまえて自らを定義し、その特性を信じて行動しなければならない。

連帯意識と連続性に関するこの根本的な要請を満たすために、私たちは、根本的な錯覚へと導かれる。それが性格である(Goffman, 1967: 238-239)。

個々人が状況に参加し、評価の高い性格の獲得のためにアクションすることで社会生活が成立する。これが社会の組織化における連帯意識の側面である。こうした単一の状況の視点で見れば、アクションは新しい性格を獲得したり、すでに獲得していた性格を失う活動であり、性格は可変的なものに見える。ゴフマンは、このアクションによって性格が変化していく側面について、「自己は自発的に再創造され得る」(Goffman, 1967: 237)とも形容している。

他方で、特定の場面で獲得された性格が規則や慣習によって次の場面にも持ち込まれると、個人は自らが獲得した性格に合わせて自己定義し、行動しなければならなくなる。そのような意味で、性格は「本質化(essentializing)」(Goffman, 1967: 218)される傾向にあり、周囲の人間も本人がその性格を維持する想定で付き合うようになる。アク

ションする際の感情管理に対する社交的評価として人は性格を獲得するわけだが、獲得した性格を維持するためには、その性格に対応する感情管理も継続しなければならない。これが社会の組織化における連続性の側面である。連続する場面の視点で見れば、特定の性格が維持されており、性格は不変的なものに見える。

このように見てくると、「社会の組織化」とは、性格の獲得や維持を通して社交的状况や場面が達成・維持されていく事態を指している。「矛盾」や「錯覚」と形容される性格概念の両義性には、社会の組織化過程における連帯意識と連続性の問題との関連で性格を記述しようとするゴフマンの意図が込められている。

二・四 性格の競争

ゴフマンは、競争や決闘のような、個人間でお互いをアクションの場として相互利用するようなケースを「個人間アクション (interpersonal action)」(Goffman, 1967: 207) と呼ぶ。個人間アクションでは、一方における強い性格の呈示が他方の性格を犠牲にすることを条件に成立している場合があり、そうした場合には、どちらが道徳的評価の高い性格を獲得するかという「道徳ゲーム」としての「性格の競争 (character contest)」(Goffman, 1967: 240) が生じる。ゴフマンは、性格の競争を「自己」の縄張り (territories

of the self) の境界をめぐる争いと言い換えている。たとえば、ゴフマンは、車を暴走させてどちらが先にハンドルを切るかで互いの度胸を競うチキンランを性格の競争の典型例として挙げている。ただ、このとき、競争者間に実力差があると勝敗が明確になってしまい、個人間アクションが成立しない。そうした場合は、個人間アクションを成立させる「調整」として競争者間にハンデがつけられ、それぞれが勝負に向けた限界ぎりぎりの努力をするようになる (Goffman, 1967: 208)。性格の競争の結果は、競争や決闘の勝敗とは一致しないという点も重要である。ゴフマンは、決闘に勝った後も敵を警戒し続けるヒーローはかえって威厳をなくすと指摘する (Goffman, 1967: 247)。この点から性格の競争は、個人間アクションをする際の感情管理に対する社交的評価をめぐる競争であることがわかる。

個人間アクションによる性格の競争には、競争に負け、弱い性格を帰属されてしまう危険があり、そうした危険を避けるために個人間アクションしないという選択肢もある。だからこそ、ゴフマンによれば、個人は性格の競争をするかしないかに関する競争である「競争の競争 (contest contests)」(Goffman, 1967: 248) に巻き込まれる。たとえば、競争の競争において、攻撃者は相手の発火点を見極めるため、不快な行為によって相手を挑発し、性格の競争に誘い込みつつ、オーディエンスの前で自らの勇敢さを誇示し、

相手が弱気を見せるのを認めさせようとする。こうした攻撃は、相互的敬意によって秩序づけられる対面的接触を危険な個人間アクションの場へと転換する。個人間アクションではその感情管理も競争関係になり、相手の感情への攻撃と自身の感情の防衛という攻防が展開することになる。場合によっては、挑発行為に応じないことが是認され、攻撃者の側に未熟のレッテルが貼られることもあるという。ゴフマンはギャング研究から、他のギャングから喧嘩を売られても、それに応じない隠遁ギャングの例を挙げている。他のギャングは隠遁ギャングを臆病者だと馬鹿にするが、隠遁ギャングは麻薬の効果に価値を置く集団なので、喧嘩好きの他のギャングたちを堅物だと考え、その挑発に応じない(Goffman, 1967: 255-256)。こうしたケースは、アクションによって獲得される性格とは異なるものの、挑発を拒否するという困難な状況で自制心を見せ、道徳的責務から逃れることに誇りを示す行為であり、「アンチヒーロー」という性格を獲得させるという(Goffman, 1967: 258)。性格は社会的評価の観点から帰属されるものだが、競争の競争は、その社会的評価や道徳性の基準が一元的ではなく、競争の参加者に複数の基準のうち、どの基準に従うかという葛藤が生じ得ることを示している。

二・五 アクションの代理経験

アクションには、危機と好機、不安と興奮が同居している。言い換えれば、アクションとは、好機や興奮、あるいは強い性格を獲得するために、危機やその不安に身をさらす対価を払うことである。しかし、ゴフマンによれば、個人は、「商品化されたアクション (commercialized action)」(Goffman, 1967: 262) をすることで、こうした対価を最小化することができる。商品化されたアクションとは、マスメディアが提供するつくり話、伝記、現在進行中の運命的な活動に関する記事などに描かれる実際的なギャングブル、性格の競争、真剣なアクションを消費することで、運命性を引き受けている現実の人物や虚構の人物に同一化し、運命的な状況に代理的に参加することを意味する。このような意味で、ゴフマンは、商品化されたアクションを「代理経験 (vicarious experience)」(Goffman, 1967: 262) とも言い換えている。商品化されたアクションでは、危機やその不安に実際に自分が身をさらすというアクションの対価は金銭的な対価へと変換され、個人は消費者として運命性をもたらす興奮を味わう。ゴフマンによれば、商品化されたアクションには、行為規範の確認という社会的機能がある。商品化されたアクションを通して、私たちは、運命的な場面にいる人物に同一化し、「この同一化によって運命的な活動のなかで確認された行為規範 (code of conduct)

——日常生活でそれを完全に維持することは非常に代償が大きく、難しい規範——が明らかにされ、再確認される」(Goffman, 1967: 266)。商品化されたアクションを通して再確認された行為規範は、日常の行為を判断するための準拠枠になるという。たとえば、ゴフマンは、白人警察官の差別的な交通違反取締に抗議した自身の経験を書いた黒人ジャーナリストの雑誌記事の例を挙げている。読者はこの記事を読み、白人警察官と黒人ジャーナリストの間で行われた性格の競争を代理経験することで、権力による人種差別的な処遇には抗議すべきという行為規範を再確認するかもしれない。

三 自己呈示論とアクション論の関係

本節では、問題設定で述べた協同・リスク回避型の感情管理に関する代表的な議論として、『日常生活における自己呈示』(Goffman, 1959 = 二〇二三) (以下、自己呈示論と略記する) における自製の規律をとりあげ、二節で検討したアクション論と比較する。先行研究において、アクション論は、アクションというリスクテイク活動における性格の呈示を議論したもの、すなわち自己呈示論の一バージョンとして理解されてきた (Lyng, 2014; Cosgrave, 2020)。ゴフマンは、社会的状況において共在する他者に呈示され、

その評価を受けるものとして性格概念を設定しており、本稿もそうした先行研究の位置づけに異論はない。しかし、感情管理の観点から見たとき、自己呈示論とアクション論には重要な差異が存在する。本節では、先行研究が触れてこなかった両議論の差異を指摘した上で、両議論に共通するゴフマンの視点を抽出する。

ゴフマンは、自己呈示論において自己呈示を「状況の定義の投影」、すなわち「特定の出来事の状態に伴う理解」(Goffman, 1959 = 二〇二三: 二二) の生成としてとらえる。状況に居合わせている人々は自己呈示を通して相互に状況の定義を投影し合っており、通常は定義間の矛盾が表面化しないように調整が行われる。このように皆が協力し合って暫定的に単一の状況の定義が成立している状態を、ゴフマンは「作業上の合意 (working consensus)」(Goffman, 1959 = 二〇二三: 二七) と呼ぶ。パフォーマーは、このようにその場の状況の定義を達成、あるいは維持するために他のパフォーマーとチームを組んでパフォーマンスしており、感情管理もそうしたチームパフォーマンスとして行われている。チームパフォーマンスでは、パフォーマンスに合わせて自分の感情を抑制する「自己規律 (discipline)」を身につけていること、偶発事の発生によってパフォーマンスの攪乱が生じた際にも、感情的に「自制 (self-control)」して対処することが重視される (Goffman,

1959 = 1101111: 111119-11140)。感情管理がチームパフォーマンスとして行われていることは、「演出者(director)」の存在するパフォーマンスの例からもわかる。チームの演出者は、パフォーマンスに役を配分し、パフォーマンスが適切なパフォーマンスや感情表出を維持できるように調整する役割を担う。ゴフマンは演出者の例として、選手が不適切なパフォーマンスや感情表出を行った際、なだめすかしや制裁によって、パフォーマンスの不適切さを是正し、試合という状況の定義を維持する野球の審判を挙げている(Goffman, 1959 = 1101111: 159-160)。

ゴフマンは、偶発事の発生といったパフォーマンスの攪乱要因への対処策としてパフォーマンスに関する予定表を作成し、そのプログラムにもとづき、ルーティーンをリハサルする方法を指摘している(Goffman, 1959 = 1101111: 135-137)。ルーティーンどおりにパフォーマンスを遂行できれば、パフォーマンスが行われる社会的施設やチームの評判、パフォーマンス個人の自己の信用が維持されるが、偶発事の発生をうまく制御できず、パフォーマンスが攪乱されてしまうと、そうした評判や信用は失墜する(Goffman, 1959 = 1101111: 137-139)。このように自己呈示論では、偶発事の発生によるパフォーマンスの攪乱の回避、チームパフォーマンスによる協同的な感情管理の実践が描かれており、協同・リスク回避型の感情管理

が主題化されている。

アクションは、運命的な活動、すなわち偶然性をはらむゆえにその結果が不確定である活動を個人が自発的に引き受けることであり、偶発事をできる限り回避し、ルーティーンを指向するチームパフォーマンスとは対置される活動である。アクションは、その運命性によって通常の自己呈示であれば抑制されるような興奮、不安、後悔、失意といった感情的反応を積極的につくりだす活動である。個人はそういった感情を管理する実践を自発的に引き受けるように調整され、その評価は個人への性格帰属のかたちをとるため、個人間アクションでは「性格の競争」や「競争の競争」が生じる。アクションにおける感情管理は、その活動単位も評価対象も個人だが、通常の自己呈示における感情管理は、チームパフォーマンスとして行われ、その評価が自己の信用だけでなく、社会的施設やチームの評判にも影響する。このように見てくると、自己呈示論が協同・リスク回避型の感情管理を主題化しているのに対して、アクション論では競争・リスクテイク型の感情管理が主題化されている。

他方で、自己呈示論とアクション論、双方の感情管理に共通する視点も指摘することができる。アクションにおける感情管理は、社会の活動場面の安定と連続性に資するか否かという社会的評価の観点から、感情が大きく揺さぶら

れる運命的な活動であつても自制でき、冷静に振る舞えることが強い性格として高く評価される。通常の自己呈示における感情管理でも、その場の状況の定義を達成・維持する目的のもと、偶発事の発生によってパフォーマンスの攪乱が生じた際にも感情的に自制して対処することが重視される。どちらの感情管理も、活動場面や状況の定義といった相互行為の環境を達成・維持するために、自制的であることが評価される点が共通しており、この点において「相互行為秩序はいかにして可能か」を問うたゴフマンの視点が貫徹している。二つの感情管理の違いは、相互行為環境を達成・維持する際、その障害となる偶然性やパフォーマンスの攪乱といったリスクについて、その管理を個人に帰属し、管理の成否を個人の性格として評価するか、あるいは、チームに帰属し、管理の成否を個人の自己の信用としてのみならず、社会的施設やチームの評判としても評価するのか、というリスクの管理方法の違いとしても理解できる。ゴフマンは、「性格に関する観念が日常生活においてどのように機能しているのか」(Goffman, 1967: 235)に関心があると述べているが、本節の整理をふまえると、「性格の機能」とは、運命性や偶然性が社会の組織化にもたらしリスクについて、その管理や成否の評価を個人帰属し、相互行為環境を達成・維持することにあるといえる。

四 結論

二節で確認したように、人間の身体やその共在をもたらししている社会的状況には運命性がはらまれており、ルーティーンワークに見える日常生活も常にアクションに転化し得る。また、挑発、すなわち「競争の競争」を仕掛けられた側は、挑発を拒否し、相互的敬意の協力体制を維持するのか、個人間アクションによる性格の競争へと足を踏み入れるのかという相互行為の転換点に立たされる。こうしたアクション論の視点は、協同・リスク回避型の感情管理と競争・リスクテイク型の感情管理が対立的な特徴をもちながらも、相互行為の展開過程において連続的な関係にあることを示している。たとえば、フェイスワーク論でも、ゴフマンは、フェイスワークにおける協力とフェイスワークの攻撃的利用、それぞれに対応する感情状態として、自他の感情的一体化と相手の感情への攻撃という区別を提示しつつ、会話の相互行為を両者の連続性のなかでとらえている (Goffman, 1967 = 101-113: 111-119)。このように検討してくると、感情管理論としてのゴフマン理論の意義を、協同・リスク回避型と競争・リスクテイク型の感情管理の類型と、両者の移行関係として相互行為過程を記述する視点の提示として抽出することができる。⁽³⁾ゴフマンの感情管理論をこのように位置づけ直すことは、協同・リス

ク回避型の感情管理のみが焦点化されがちであった先行研究の状況に対し、ゴフマン理論の理解や応用可能性を深化させるものとなる。

崎山は、現代社会における感情管理化の進展について、「公的領域における感情労働の進展による感情管理の他律化の進行」がもたらす「自律的な感情管理の抑圧と自己感情からの疎外」と、その反作用としての「私的領域で自律的な感情管理によって自己感情を保つことの称揚」の二つの形態を挙げている(崎山、二〇〇五:二五—二六)。アクションにおける感情管理は、自発的に引き受けたかのように調整され、その成否は社会の組織化の観点から道德的な評価を受ける。すなわち、アクションにおける自律的な感情管理は擬制されたものであり、社会の組織化に貢献できるように自制的な振る舞いへと仕向けられるという意味で他律性をはらんでいるが、新しい性格を獲得し、自己を再創造する好機を個人に提供するものでもある。そのような意味で、アクションにおける感情管理は、他律的な感情管理による自己感情からの疎外か、自律的な感情管理による自己感情の保持か、という対立図式には収まらない。アクション論は、個人と感情管理の関係を疎外論的な視点で対置するのではなく、個人を個人たらしめる「性格」の獲得・維持と、社会の組織化過程を不可分なものとして結びつける実践として感情管理を位置づける。本稿が抽出した

アクションにおける感情管理という視点は、感情管理が形成しようとした個人と社会の根本的な関係を記述する有用な枠組を提供してくれるだろう。

註

(1) ゴフマンはアクション論の冒頭で、「十年前、あまり上品ではない都市部のアメリカ人男性の間で『アクション』という言葉が『アクションの存在しない』状況とは正反対の特別な状況に關して、パーソンズ的ではない意味で使われた」(Goffman, 1967:49)と述べており、パーソンズ理論における行為概念とは異なる意味がアクション概念に含意されていることを示唆している。ゴフマンは名指していないが、シャリンによれば、ここで「伝統的な社会学」と言われているのは、規範による個人の欲求の統制を前提とするパーソンズやマーティンといった構造機能主義者の社会学である(Shalin 2016: 19)。

(2) 「社会的施設 (social establishment)」とは、「知覚をささげる固定的な隔壁に囲まれていて、そのなかで特定の種類の活動が規則的に行われるあらゆる場所」のことを指す。ゴフマンは自己呈示論で、「あらゆる社会的施設は印象管理という観点から研究でき、そうした研究は有益なものだと指摘」(Goffman, 1959: 二〇三—三七一)している。たとえば、自己呈示論の第三章で提示される表領域、裏領域、外部といった場所的な概念は、社会的施設における印象管理を記述する際、必要不可欠な枠組である。

(3) 実際、マーティン・マローンは、アクション論における性格の

競争概念を競争型のフェイスワークに位置づけ、大学院の筆記試験に関する大学院生の会話分析を行い、会話の参加者間に性格の競争が発生した段階から状況の定義に関する暫定的な協定である作業上の合意が形成される過程を記述している (Malone, 1997)。

文献

- Billig, Michael, 2001, "Humour and Embarrassment: Limits of 'Nice-Guy' Theories of Social Life," *Theory, Culture & Society*, 18 (5): 23-43.
- Cosgrave, James, 2008, "Goffman Revisited: Action and Character in the Era of Legalized Gambling," *International Journal of Criminology and Sociological Theory*, 1(1): 80-96.
- , 2020, "Where Isn't Action," *Critical Gambling Studies*, 1(1): 1-11.
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Blackwell Publishing. (秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳, 二〇〇五, 『モダンニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社)
- Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday. (中河伸俊・小島奈名子訳, 二〇一三, 『日常生活における自己』筑摩書房)
- , 1961, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, The Bobbs-Merrill Company. (佐藤毅・折橋徹訳, 一九八五, 『出会い——相互行為の社会学』誠信書房)
- , 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour*, New York: Doubleday. (浅野敏夫訳, 二〇〇二, 『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学〈新訳版〉』法政大学出版局)
- , 1983, "The Interaction Order," *American Sociological Review*, 48(1): 1-17.
- Heath, Christian, 1988, "Embarrassment and Interactional Organization," Paul Drew and Anthony Wootton eds., *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, Oxford: Polity Press, 136-160.
- Hochschild, Arlie, 1979, "Emotion Work, Feeling Rules, and Social Structure," *American Journal of Sociology*, 85 (3): 551-575.
- , 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press. (石川准・室伏亜希訳, 二〇〇〇, 『管理される心——感情が商品となる社会』世界思想社)
- Jacobsen, Michael Hviid, 2022, "Goffman and the Emotions: Timely Reflections on Erving Goffman as 'Emotion Theorist'," Michael Hviid Jacobsen and Greg Smith eds., *The Routledge International Handbook of Goffman Studies*, New York: Routledge, 157-170.
- Kristiansen, Søren, 2022, "Goffman and Gambling Studies," Michael Hviid Jacobsen and Greg Smith eds., *The Routledge International Handbook of Goffman Studies*, New York: Routledge, 276-286.
- Lyng, Stephen, 2014, Action and Edgework: Risk Taking and Reflexivity in Late Modernity," *European Journal of Sociology*, 17(4): 443-460.
- , 2016, "Goffman, Action, and Risk Society: Aesthetic Reflexivity in Late Modernity," *UNLV Gaming Research & Review Journal*, 20(1): 61-78.
- Mack, Ryan and Gary Alan Fine, 2022, "Nothing Funny about That! Erving Goffman and the (Un) humorousness of Everyday Life," Michael Hviid

Jacobsen and Greg Smith eds., *The Routledge International Handbook of Goffman Studies*, New York: Routledge, 399-410.

Malone, Martin, 1997, *Worlds of Talk: The Presentation of Self in Everyday Conversation*, Cambridge: Polity Press.

崎山治男、二〇〇五、『心の時代』と自己——感情社会学の視座』勁草書房。

Scheff, Thomas, J., 2006, *Goffman Unbound!: A New Paradigm for Social Science*, Boulder: Paradigm Publishers.

———, 2013, “Goffman on Emotions: The Pride-Shame System,” *Symbolic Interaction*, 37(1): 108-121.

Shalin, Dmitri, 2016, “Erving Goffman, Fateful Action, and the Las Vegas Gambling Scene,” *UNLV Gaming Research & Review Journal*, 20(1): 1-38.

若狭優、二〇二二、『ギャンブル』というメタファー——運命性とアクションの検討を通じて』『現代社会学理論研究』一六：五七—六九。

安川一、一九九七、『感情するゝ秩序——当惑と相互行為秩序』岡原正幸・山田昌弘・安川一・石川准編『感情の社会学——エモーション・コンシヤスな時代』世界思想社、一四〇—一七四。

付記

本稿はJSPS科研費 JP24K05257 の助成を受けた研究成果の一部である。